

# 鑄直される伝統

—— アイルランド自由国の貨幣デザインプロジェクト ——

高橋優季

## 1. はじめに

1922年、アイルランドは過去3年間続いた独立戦争（Anglo-Irish War）を経て新生国家「アイルランド自由国（Irish Free State）」を樹立し、ブリテン連合王国からの名目上の独立を果たした。<sup>1</sup> ただし、これは全土32州のうち南部26州による独立で、残る6州は引き続き連合王国の構成部分として存続した。<sup>2</sup> この「自由国」の政治的な体制は、あくまでも英国国王を元首とした英国統治下の自治国家としての独立であったため、完全な主権国家としての「共和国」の実現を求める急進的な共和主義者達が激しく反発した。そして同年から早くも国内は分裂し、さらに2年間にわたる内戦（Irish Civil War）に突入する。アイルランドが独立するためには、政治的な意味においてもまた集合心理的に見ても内部の分裂は不可避であったといえる。その背景には、おおむね12世紀に遡るイングランド人による植民支配の歴史がある。強硬な土地支配と宗教的弾圧、そして経済的搾取が断続的に行われるうちに発生した人流が、やがて単一に「アイルランド人」として定義づけ

---

<sup>1</sup> 宗主国イングランドを中心とする、ウェールズ、スコットランド、アイルランドによって形成。以降、英国と表記する。なお本稿でいう「英国」は、連合王国全体からアイルランドを除いたブリテン島地域を指す場合もある。

<sup>2</sup> アイルランドの歴史概要については、伊達直之、「20世紀アイルランド詩に見るエスニシティの意識とその脱歴史化—詩人 W.B. イェイツの独立運動・内乱・文学」、渡辺節夫編『近代国家の形成とエスニシティ（青山学院大学総合研究所業書）』（東京：勁草書房、2014年）、小関隆『アイルランド革命 1913-23 - 第一次世界大戦と二つの国家の誕生』（東京：岩波書店、2018年）を参考にした。

ることのできない複雑な民族構成を作り上げていた。つまり、元来からの信仰宗派であったカトリック教徒の生粋アイルランド人のほか、英国からの移民を祖先に持つプロテスタント系のアングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) など、血筋や信仰、言語も異なる民族が互いに異なる国民意識を持ちながら共存していたのである。また、抑圧されてきた被支配民としての連帯意識によって反英感情を高めた集団は宗主国からの完全分離を求め、そのいっぽうで英国との経済的結びつきの継続が自国の経済発展にとって不可欠であるという現実を重視した者達は自治権の獲得 (Home Rule) を主張した。最終的に同国の南部「アイルランド共和国 (Republic of Ireland)」が実現したのは第二次世界大戦後の1949年のことである。<sup>3</sup>

W.B.イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は、1880年代後半から1900年代初頭にかけてアイルランドを中心に広まった文化の復興運動「ケルト復興 (Celtic Revival)」を推進した国民的詩人として現在でも広く知られている。創作活動をとおして彼は常に自身の置かれた時代と国家のあり方を問い続け、1923年にノーベル文学賞を受賞した。母国が内戦の最中にあつた年である。イエイツはまた、「自由国」成立時に上院議員として国家運営の舵取りを担った一人でもある。英国からの移民の家系出身であつた彼の政治的立場は、自身とおなじアングロ・アイリッシュを代表していた。それまでアングロ・アイリッシュは、政治経済のほか文化的にも多くの面で支配的な影響力を持っていたが、新政権下でカトリック系アイリッシュの勢力が多数派を占めると、宗教的な面においてもマイノリティとなつていった。イエイツはこうした少数派の主張や要望が議会にとどけられるよう上院議会の構成員に加つたのだ。

1922年の議員就任後約6年間の任期のなかで彼は、教育制度の充実と芸術文化の促進を主な担当分野として活動した。独立と建国、そして自治から共和制へ急激に政局が変化した1920年代にあつて、「ケルト復興」が実証して

---

<sup>3</sup> その前年にあたる1948年に「アイルランド共和国法 (Republic of Ireland Act)」が採択される。

きたような文化的活動の重要性はすでに減じて行きつつあった。しかし、1926年から1928年にかけてイエイツが総指揮を執った、アイルランド自由国の貨幣デザイン選定プロジェクトには、彼が前世紀から貫いてきた文芸創作上の姿勢が反映されている。それは、幾世紀にわたって受け継がれてきた伝統をその時代に合わせて刷新していくという創作姿勢である。貨幣経済が国の産業を動かしていくと、硬貨の表面に浮き彫られた形象がその国の社会的営為にとって意味のあるイメージを発し、貨幣を利用する国民がそれを受け止め理解することで、貨幣が国の経済的価値と文化的・芸術的価値を繋ぎ合わせる要諦になるのではないだろうか。そのようにして新生アイルランド自由国の硬貨は確かに国家のアイデンティティを象徴したといえる。それらに刻まれた数々のモチーフは、綿密な歴史調査と研究に基いていて、そして何よりも注目すべきこととして伝統を新しく捉え直してこそ選び取られたものであるのだ。

本稿では、まずアイルランド自由国成立に先駆けて、アイルランド人としての民族意識がどのような文化的背景で形成され分裂したのかを、アイルランドの植民地支配の歴史と共に簡単に振り返る。そして「ケルト復興」をおしてイエイツと志を共にした作家や芸術家達が模索した、ほかではないアイルランド独自の文学や美術とはどのような創作姿勢の上に成り立っていたのかを確認する。その上で、アイルランド自由国の貨幣選定の工程詳細を確認し、このプロジェクトがいかにして、最後のと言ってもよい、「ケルト復興」の成果となり得たかを検証する。

## 2. 植民地となったアイルランドの民族意識と「ケルト復興」

ブリテン諸島方面のヨーロッパ先住民族の一派として「ケルト」という用語を捉えた場合、それはイングランドの主流民族であるアングロ・サクソン系とは別個の民族を指す。ローマ時代を経て、ケルト系民族はアイルランド、ブリテン島内のウェールズ、スコットランド地方に定住し、固有の言語と習

俗が定着した。アイルランドでは5世紀にキリスト教が持ち込まれたことによって、ローマ・カトリック系の信仰がいわゆるケルト文化と融合する。8世紀以降度重なるヴァイキングの襲来にも耐えたケルト系アイルランド民族はしかし、12世紀に攻め入ってきたノルマン人による侵略の影響を逃れることはできず、ノルマン侵攻に抵抗したイングランドの支配下に組み込まれることになる。そして、1541年にヘンリ8世が自らアイルランド国王として即位したことで同国の支配は本格的なものとなった。さらに清教徒革命後の1641年からはオリバー・クロムウェルによる大規模な弾圧を受け、アイルランドのカトリック教徒たちはプロテスタントへの改宗を強要された上、入植者である英国人にも有利な法整備のもと土地や財産所有権を失った。結果、1776年時点でアイルランド総人口の約75%を占めたカトリック教徒の所有地は全土の僅か5%にまで減少した。<sup>4</sup> この記録は、当時のプロテスタント系イングランド人の優位体制がいかに決定的なものであったかを示す顕著な一例であるといえる。1800年の「合同法 (Act of Union)」によって英国に併合されて以降、独立までのあいだに5回の対英武装蜂起が決行されたが、そのいずれも徹底的に鎮圧された。その一方で、1845年に「ジャガイモ飢饉 (Great Famine)」が発生した際には、アイルランド西部を中心に多数の死者が出たにも拘わらず英国政府は実質的な救済政策を怠ったため、全人口のうち約三分の一以上が失われた。人口激減の要因は餓死か国外移住のどちらかであった。このような過酷な状況が続くアイルランドで、反英という連帯意識のもと団結して独立国家を築く希望を持つことは、特に19世紀ヨーロッパ全域でナショナリズムの機運が高まった時代においては、自然の成り行きであったといえる。

しかし、何世紀にもわたり植民地支配が続くということは、それだけ長い期間のなかで生活習慣も使用言語も異なる民族が混交する機会が増えるということでもある。英国から移住しアイルランドに帰化した入植者、つまりア

---

<sup>4</sup> 小関, 6。

ングロ・アイリッシュの人口比重が高まるようになったのである。そして、アイルランドの経済や産業が英国との密接な関係なくしては成り立たなくなっていたのも現実である。1916年に最後の対英武装蜂起として知られる「復活祭蜂起 (Easter Rising)」によって独立運動が加速するまでは、英国との政治経済的な連携を保持した上でアイルランドの自治を確立しようという声が優勢であった。このような体制の支持者たちが目指したのはアイルランド民族としての精神的な自立であり、それが文化的な運動として活発化したとき「ケルト復興」として標榜され、その担い手の多くがイエイツと同様に出自としては英国由来でありながらアイルランド人という国民意識を持ったアングロ・アイリッシュであった。彼らは実体的な「ケルト」の民族性に基ついた文化の復興と保全を目指したのではなく、アングロ・サクソンから差別化した心性としての「ケルト」を概念的に捉え直し、文学や美術を通じて芸術的に表現しようと試みたのだ。そして、文学の領域においてはイエイツはじめ彼と同時代のアングロ・アイリッシュの作家たちはアイルランドに古代から伝わるケルト神話や伝説、民間の口承・伝承による妖精譚を主題とする詩や演劇を英語で創作し国民文学を確立しようとした。

「ケルト復興」の作家達の大部分がアイルランドの土着の言語であるゲール語ではなく英語で作品を発表したことも重要である。イエイツは著作のなかで「ゲール語は私の公用語ではあるが母語ではない」<sup>5</sup>と述べている。こうした言明は、ゲール語の復活によって脱英国化とアイルランドの民族自決を達成しようと志した生粋アイルランド人の作家達の批判を招きもした。<sup>6</sup>しかし、イエイツの言語選択は彼のアングロ・アイリッシュとしてのアイデンティティをはっきりと表明しているだけでなく、彼の文芸活動が現代に向けて発信されたものだという事を再認識させるものである。現実問題とし

<sup>5</sup> William Butler Yeats, *Essays & Introductions* (London: Macmillan, 1961), 520. 以降E&Iと表記。

<sup>6</sup> 例えば、1893年に結成された「ゲール語同盟 (the Gaelic League)」は、ゲール語の復興を目的とした活動団体で、後アイルランド共和国初代大統領となるダグラス・ハイド (Douglas Hyde, 任期1938-44) によって設立された。

て、当時のアイルランド社会ではゲール語はすでに地方の少数住民が残る農村地帯を除き日常生活では用いられなくなっていた。そして、先に言及したようにイエイツらは過去の文化的遺産の純粋な復活や保護ではなく、現代の社会に受け入れられる言語による新たな創造と活性化を目指したのである。1901年にイエイツが「アイルランドと芸術 (Ireland and the Arts)」と題したエッセイのなかで「わたしは、古代の諸芸術を再創造 (re-create) したいと思う<sup>7</sup>」と述べた意味は大きい。それはつまり伝統を刷新した上で現代生活によみがえらせようという志である。こうした姿勢は、後に述べるように、イエイツ自身の文芸創作にみられる劇的な変化にも通じている。「ケルト復興」を背景にケルト神話や伝説の世界を彷彿とさせる幻想に満ちた彼の作風は、20世紀に入ると現代アイルランドの社会そのものを題材とし、モダニズム詩人として評価が改められていくのだ。

### 3. 「ケルト復興」のもう一つの側面としてのアーツ・アンド・クラフツ運動

以上により確認した、伝統を刷新するというスタンスは、「ケルト復興」のなかで文学に比肩しうる他の活動領域にも見られた。それがアイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動である。工芸美術の創作及び展覧活動を主な目的としたこの運動は名称からも分かるように、英国ヴィクトリア朝後期においてウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) が提唱したことにより広まったアーツ・アンド・クラフツ運動に由来する。この運動は、元々は産業革命以降に加速した機械化と大量消費経済に対抗するかたちで社会生活に芸術美を融合させようとしたものだったが、1894年にアイルランド・アーツ・アンド・クラフツ協会 (The Arts and Crafts Society of Ireland) が発足すると「ケルト復興」の精神を工芸美術によって視覚的に表現する組

---

<sup>7</sup> *E&I*, 204-06.

織的活動としてアイルランドの民衆に受け入れられた。

イエイツらの文芸活動と同様、この運動の発展に貢献した芸術家達もまた、アングロ・アイリッシュあるいは英国出身者がほとんどであった。例えば、1902年にイエイツの妹達、リリィ (Suzan Mary 'Lily' Yeats, 1866-1949) とロリィ・イエイツ (Elizabeth Corbet 'Lollie' Yeats, 1868-1940) が、女性の社会的自立と勤労機会の増大を目指すアーティスト、イヴリン・グリーソン (Evelyn Gleeson, 1855-1944) と共同して立ち上げたダン・エマー・ギルド (Dun Emer Guild)、続いて1908年にイエイツ姉妹が独立して設立したクアラ・インダストリー (Cuala Industries) は、20世紀以降のアイルランドのなかでも特に優れたクラフツ工房である。1890年代後期のロンドンにて、ウィリアム・モリスの娘、メイ・モリス (May Morris, 1868-1938) の元で修業して熟練の刺繍師となったリリィはその英国由来の技術とデザインスタイルを、同じくロリィはロンドンにて製本の一流専門家であったエメリー・ウォーカー (Sir Emery Walker, 1851-1933) に就いて習得した18世紀の書籍印刷の技術を初めてアイルランドにもたらした。

このような活動をとおして大衆に普及した「ケルト復興」の視覚的表現を具体的に示す例として、古代ケルトより継承されたという特有の「ケルト文様」が挙げられる。これは中世アイルランドのキリスト教福音書「ケルズの書 (Book of Kells)」の写本のなかで最初に確認されたものである。アイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動を通して「ケルト文様」は日用品から教会装飾まで多岐に渡る手工芸に用いられ、当時のアイルランドの生活空間に広く浸透した。例えば、ロンドンの高名な医師の夫人で慈善事業家としても知られるアリス・ハート夫人 (Alice Hart, 1848-1931) は、ジャガイモ飢饉の影響がいまだに残るアイルランド西部ドネゴール州を視察し、1883年に現地の貧困救済のために布地製品の制作工房「ドネゴール・インダストリアル・ファンド (The Donegal Industrial Fund)」を設立した。この工房で夫人は、「ケルト文様」を取り入れた製品の生産と販売を通して地元住民の雇用と自活支援に役立てただけでなく、それらをロンドンにまで流通させるこ

とに成功した。<sup>8</sup> 彼女の考案した刺繍のデザインは「ケルト刺繍 (Kells Embroidery)」として知られた。

アイルランドの独自性を美的に表現した手工芸が大衆的に普及していくなかで求められたことは、「古くからの伝統を模倣によって存続させるのではなく、製作者たち自身が生きる現代の活動から受けるインスピレーションによって発展させていくこと」<sup>9</sup>であった。しかしながらポール・ラーマーが指摘するように、20世紀に入っても前世紀と変わらぬデザインの量産が諸工芸において顕わになったとき、<sup>10</sup> それら国家的装飾モチーフに対する評価は低下傾向にあった。アイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動の存続は、アイルランド・アーツ・アンド・クラフツ協会が1925年に開催した第7回目の展覧会までと見做されている。<sup>11</sup> このとき当該協会の組織委員であり自らもエナメル装飾を専門とした工芸家のオズワルド・リーヴス (Oswald Reeves, 1870-1967) は、「ケルズの書の複製 (copy) はもうやめるべきだ」と訴えている。<sup>12</sup> この翌年にアイルランド自由国の貨幣デザインを選定する委員会が設置されたタイミングを考えると、議長を務めたイエイツと委員達のプロジェクトは、同じ頃に警鐘を鳴らされたアイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動の複製傾向への反省としてみる事ができる。<sup>13</sup>

---

<sup>8</sup> Paul Larmour, *Celtic Ornament* (Dublin: Eason & Son Ltd.1981), 7-8.

<sup>9</sup> Percy Oswald Reeves, 'Irish Arts and Crafts' in *Studio*. Vol.72 (1917), 17.

<sup>10</sup> Larmour, 1-2, 16.

<sup>11</sup> Paul Larmour, *The Arts & Crafts Movement in Ireland* (Belfast: Friar's Bush Press, 1992), 216-18. Nicola Gordon Bowe, 'The Irish Arts and Crafts Movement (1886-1925)', *GPA Irish Arts Review Yearbook 1990-1991*, 172-85.

<sup>12</sup> Jeanne Sheehy, *The Rediscovery of Ireland's Past: the Celtic Revival 1830-1930* (London: Thames and Hudson, 1980), 170. 1924年8月7日付の *Irish Times* でも「あまりにも多くの工芸職人らがケルト文様のデザインへの執着から抜け出せずにいる」との批判が述べられている。

<sup>13</sup> Sheehy, 170, 175.

#### 4. アイルランド自由国貨幣デザイン選定プロジェクト

1926年4月13日、「貨幣鑄造法 (The Coinage Act)」が制定され、銀、ニッケル、銅から成るアイルランド自由国独自の貨幣単位が取り決められた。このとき、単位ごとに貨幣の両面に施すデザインを決める判断を芸術的鑑識眼のある者に委ねようという提案が出された。これを受けて、翌月5月19日に貨幣デザイン選定委員会が発足した。構成メンバーは以下の通りである。

W.B. イェイツ、委員会議長

ダーモッド・オブライエン (Dermod O'Brien), <sup>ロイヤル・ヒベルニアン</sup>王立アイルランドアカデミー  
会長

ルシウス・オカラガン (Lucius O'Callaghan), <sup>ナショナル・ギャラリー</sup>国立美術館館長

トマス・ボドキン (Thomas Bodkin), 国立美術館理事で後に館長に就任

バリー・M・イーガン (Barry M. Egan), コーク市議会議員<sup>14</sup>

議長にイェイツを迎えた委員会は、彼の指揮のもと国内外から同時代の彫刻家を候補者として募り、各貨幣単位ごとに試作品を提出してもらい審査の上選出するというコンペティションを計画した。

最初の課題は硬貨のモチーフの決定であった。議論には芸術や産業、金融など諸分野における専門家らの協力が得られた。1926年6月17日、金融大臣 (Minister for Finance) からの要望に基づき3点の暫定的な決定が出された。1点目は、全ての硬貨の片面はアイルランドの伝統楽器アイリッシュ・ハーブのモチーフで統一することである。このモチーフの使用はヘンリ8世の統治時代に由来し、18世紀になるとアイルランドの紋章として定着し始めた。それが1862年になると黒ビールで有名なギネス社 (Guinness Brewery) の

<sup>14</sup> Brian Cleeve, ed., *W.B. Yeats and the Designing of Ireland's Coinage* (Dublin: The Dolmen Press, 1972), 25-26. 以降、*Ireland's Coinage* と表記。

トレードマークとなった。<sup>15</sup> 2点目は、貨幣の表記と金額単位は全てゲール語で統一することである。「アイルランド自由国」の表記も「Irish Free State」ではなくゲール語で「Saorstát Éireann」と記され、ゲール語を知らない者のために数字の表記を加えることが決められた。そして3点目は、具体的な実存人物の肖像は硬貨に取り入れないことである。これには、硬貨のモチーフをより自由な裁量でデザインできるように、との意図も込められていた。

続いて1926年7月8日、第3回目の会議で、硬貨のもう片方に施すモチーフが議題に上がった。この時、当時ダブリン美術学校（Dublin Metropolitan School of Art）の講師であった画家のウィリアム・オーペン（Sir William Orpen, 1878-1931）のアイデアが採用される。それは「コインデザインの全体に一つの連なりのある物語性を持たせた方が良い」<sup>16</sup>というものであった。このときイエイツは、古代都市国家カルタゴ、メッシナ、ラリッサで紀元前に使われた硬貨を参考にしようと提案した。それらに彫られていたモチーフは馬のほか牛、ウサギなどで、古代国家における農耕生活を象徴していた。イエイツはまた、現代アイルランドのスポーツや産業を表すデザインを加えようという案も出した。<sup>17</sup> 委員会はこれらの案をまとめ、7月22日の第4回目の会議を経て狩猟・牧畜動物を貨幣モチーフに採用することを決定した。8月6日に金融大臣に提出された報告書によると、それぞれの貨幣単位と対応する動物のモチーフは以下の通りである。

半クラウン（ゲール語でLeath-choróin, 貨幣単位数は2/6と表記）【図1参照】  
馬。騎手のいない形で、前述のカルタゴやラリッサの古代硬貨が参考とされた。アイルランドが産出する優れた馬の血統種が国の誇りとされた。

<sup>15</sup> Sheehy, 12.

<sup>16</sup> Leo T. McCauley, Secretary to the Committee, 'The Summary of the Proceedings of the Committee' in *Ireland's Coinage*, 27-28.

<sup>17</sup> *Ibid.*, 28.

フロリン (Flóirín, 2) 【図2参照】

鮭。主要な漁業資源であるだけでなく、鮭は知恵の神としてアイルランド神話や伝説に多く登場する。これらのなかには、鮭と共に「叡智の木の実」としてハシバミも描かれてきたことから、鮭にハシバミの枝を添えることが勧められた。

シリング (Scilling, 1) 【図3参照】

牛。半クラウンの馬と同じく、古代国家の硬貨が参考にされ、それに倣って牛がアイルランドの優れた家畜として、また重要な貿易の対象でもあることを表した。そして、馬と向き合って並べられるよう牛の顔の向きも細かく定められた。

6 ペンス (Reul, 6) 【図4参照】

アイリッシュ・ウルフハウンド。国内在来種であるゆえ、この動物の身体的特徴がよく掴めないアーティストに助言するため、「アイリッシュ・ウルフハウンド協会 (The Irish Wolfhound Club)」や「アイリッシュ・ケンネル・クラブ (The Irish Kennel Club)」といった組織団体の代表者たちが写真やスケッチを提供した。

3 ペンス (Leath-reul, 3) 【図5参照】

ウサギ。狩りのスポーツと関連づけて採用された。委員会は6ペンスのウルフハウンドと合わせると程良いシンボルの調和が取れると考えた。

ペニー (Pingin, 1) 【図6参照】

雌鶏とひよこ。素朴すぎるデザインだとして批判を受けることを委員会は懸念していたが、当時養鶏は需要が高まりつつある主要産業であり、また以下に示すイェイツの呼びかけにもあるように、それを営む農家の女性や子供たちを喜ばせたいという意図によって採用された。

半ペニー (Leath-phingin, 1/2) 【図7参照】

豚の親子。一般的に豚に刷り込まれている、嘲笑の対象という不公平で卑俗なイメージを払拭し、気高い生き物として見直そうという考えと共に、国内の畜産業のひとつとして養豚業のもたらす価値と恩恵が強調された。

ファージング (Feoirling, 1/4) 【図8参照】

ヤマシギ。長い嘴を特徴とするこの鳥は、狩猟家にとって魅力あるシンボルと考えられ採用に至った。<sup>18</sup>

イエイツは、この決定について、次のように述べている。

われわれが（硬貨のモチーフに）鳥や獣を選べば、それは、幾世紀来の経験から分かる通り、芸術家にとっては一大傑作を生むチャンスを与えることになるだろうし、誰もが知っている通り、一つ一つの硬貨を誰よりもじっくり眺める人々つまり芸術愛好家にも子供達にも気に入られるものとなるだろう。さらに、乗馬をたしなみ、釣りを楽しみ、牧畜にいそしむこの国の人々にとってこれ以上に相応しい象徴的なモチーフはないだろう。<sup>19</sup>

イエイツのこの発言には、硬貨の使用を介して民衆が職業や世代の隔てなく調和した集合体となって日常生活を送ることができるように、との思いが表れている。そのイメージはまた、彼が「ケルト復興」を通して民衆のアイランド人としての国民意識をまとめようとしたことにも重ねられる。

次に、貨幣デザインのコンペティション参加者が選出された。9月2日、第7回目の審議で委員会がノミネートしたアーティスト達に案内状が郵送され、その結果以下の候補者達がコンペティション参加の意志を示した。

<sup>18</sup> *Ibid.*, 28-34.

<sup>19</sup> W. B. Yeats, 'What we did or tried to do' in *Ireland's Coinage*, 10.

アルバート・パワー (Albert Power), ダブリン  
 オリヴァー・シェパード (Oliver Sheppard), ダブリン  
 ジェローム・コナー (Jerome Connor), ダブリン及びニューヨーク  
 パブロ・モービドゥッチ (Publio Morbiducci), ローマ  
 ポール・マンシップ (Paul Manship), ニューヨーク  
 パーシー・メトカルフ (Percy Metcalfe), ロンドン  
 カール・ミルズ (Carl Milles), スウェーデン  
 イヴァン・メストゥロヴィッチ (Ivan Mestrovic), セルビア<sup>20</sup>

上記のうち、ローマ出身のパブロ・モービドゥッチについてイエイツは当初から彼の手掛けたイタリアの貨幣デザインを高く評価していた。<sup>21</sup> スウェーデン出身のカール・ミルズとセルビア出身のイヴァン・メストゥロヴィッチは、彫刻の分野において従来踏襲されてきた自然主義 (naturalism) から脱却する、モダニズム的な彫刻スタイルを打ち出したとして、1930年代にかけてダブリン美術学校において模範的な存在と見做されていた。<sup>22</sup> 厳密には、メストゥロヴィッチはコンペティションの参加者ではなかった。それは委員会が送付した案内状が宛先住所の間違いにより期限内に届けられず、参加が間に合わなかったからである。しかし彼は好意によりアイリッシュ・ハーブのメダルをデザインして委員会に寄贈した。地元出身の3名のうち、とくにオリヴァー・シェパードはアイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動を牽引した彫刻家で、現在もダブリン中央郵便局に設置されている「復活祭蜂起」の記念像の作者として知られている。<sup>23</sup> シェパードは19世紀末にパリや

<sup>20</sup> *Ibid.*, 35.

<sup>21</sup> *Ibid.*, 9-10.

<sup>22</sup> John Turpin, *Oliver Sheppard 1865-1941: Symbolist Sculptor of the Irish Cultural Revival* (Dublin: Four Courts Press, 2000), 30.

<sup>23</sup> 「クファーリンの死 (*The Death of Cuchulain*)」(1912) のこと。この彫像の制作背景の詳細については、高橋優季「変貌するクファーリン伝説：ダブリン中央郵便局からオールダリーの丘へ」、『言語センター広報』29号 (小樽商科大学, 2021年3月) 参照。

ロンドンで修業し、1901年に帰国した際イエイツの推薦を受けてダブリン美術学校の彫刻部門の教授職に就いた。アルバート・パワーはシェパードに師事した後、国内の彫刻家として名声を得た。彼はイエイツをはじめ同時代の多くのアイルランド著名人の彫像を製作したことで知られる。

コンペティション参加者達は、1927年1月31日までにデザインを製作し委員会に提出するよう求められた。デザイン考案の参考として、アイリッシュ・ハーブ（ダブリンのトリニティ・カレッジ所蔵）の写真、「王立ダブリン協会（the Royal Dublin Society）」が推薦した狩猟馬の写真、アイリッシュ・ウルフハウンドの写真やスケッチ、前述したカルタゴ出土の硬貨の写真、「王立アイルランド古物協会（The Royal Society of Antiquaries of Ireland）」が提供したゲール語の文字表記のサンプル、そしてデザイン採用の可否に関わらず謝礼金50ポンドが送られた。<sup>24</sup>

デザインの選考は1927年2月15日、第10回目の委員会会議で行われた。提出された作品は、製作者の氏名を伏せた上で、委員全員による投票制によって審査された。全会一致で選ばれたのは、7名の参加者のうち最年少かつ最も無名だったロンドン出身のパーシー・メトカルフだった（【図1～8】参照）。その結果、アイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動に貢献した地元出身者達の作品が不採用になった一方で、アイリッシュではない若手英国人が勝利したということから、この運動の衰退がここに兆しているという見方も生まれた。<sup>25</sup>

---

<sup>24</sup> *Ireland's Coinage*, 27, 35-36.

<sup>25</sup> Sheehy, 170.



【図1：半クラウン，馬（Leath-choróin, 2/6）】  
左：1933年，右：1998年（20p）



【図2：フロリン，鮭（Flóirín, 2）】  
左：1928年（発行初年），中：1961年，右：1993年（10p）



【図3：シリング，牛（Scilling, 1）】

左：1928年（発行初年），中：1963年，右：1998年（5p）



【図4：6ペンス，アイリッシュ・ウルフハウンド（Reul, 6）】

左：1928年（発行初年），右：1968年



【図5：3ペンス，ウサギ（Leath-reul, 3）】  
1942年



【図6：ペニー，雌鶏とひよこ（Pingin, 1）】  
左：1928年（発行初年），右：1968年



【図7：半ペニー，豚の親子（Leath-phingin, 1/2）  
左：1928年（発行初年），右：1940年



【図8：ファージング，ヤマシギ（Feoirling, 1/4）  
1970年（50p）

委員会に提出された全てのアーティストの作品は、後に展示会の形で一般に公開された。その際、コンペティションの参加が叶わなかったメストゥロヴィッチのデザインも披露された。委員会は彼の寛大な好意を称え、アイルランド自由国政府に対し将来的にメストゥロヴィッチのデザインをメダル授与や紋章に使うよう進言している。イエイツは後の報告で、不採用になったほかの作品についてもそれらの芸術性を高く評価している。実際に、不採用になった理由が芸術的観点に無い場合も少なくなかった。例えば、イエイツは古代カルタゴの硬貨に似た印象を与えるミルズの作品について、躍動感あふれるデザインに見られる超自然的なエネルギーが2000年の時を経てシチリアから地中海を渡って伝わってくるようだと述べている。<sup>26</sup> それにも拘わらずミルズの作品が除外されたのは、その彫刻が高浮き彫り (high-relief) であるため、原始的な打ち型となり、現代の貨幣の実用性には不向きと判断されたからであった。対するに、他のアーティスト達のデザインの表面は滑らかに彫られ静的な印象を与える。特に、採用されたメトカルフの動物達はみな浅い彫られ方をしており、横向きで直立した姿勢で静謐なイメージの統一感をもたらしている。このコンペティションの成功によって才能と技術が広く認められたメトカルフは、その後英国本国のみならず中東エジプトやイラクなど海外の硬貨のデザインも幅広く手掛けるようになった。<sup>27</sup>

## 5. 言葉を鑄直すこととは

以上のプロセスを経て、アイルランド自由国成立後最初の硬貨は鑄造された。イエイツを中心とする委員会が一貫して取った方針は、伝統を守りながら前衛的であることだったといえる。そして、硬貨の片面には統一して古来のシンボルであるアイリッシュ・ハーブを、もう片面には現代の国内産業と人々の生活手段を象徴する動物を刻むことで、伝統と新しさ、新旧の両面が

<sup>26</sup> Yeats in *Ireland's Coinage*, 16.

<sup>27</sup> *Ibid.*, 73.

硬貨の表と裏によって表現されることになった。

伝統を受け継ぐ一方で、それを新たに発展させ時代に合った芸術的表象を追求すること。貨幣デザインプロジェクトのこうした姿勢は、先に触れたとおり20世紀初頭にイエイツ自身の文芸創作が劇的な変貌を遂げたことに近似している。当時そのきっかけを与えたのは、アメリカの詩人で文芸評論家エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885-1972）である。イエイツがパウンドとの交流を深め始めた1912年頃、パウンドは貨幣の鑄造と流通から着想を得た詩論を展開していた。造幣局の職員を父に持つ彼は、このとき詩という言語表現を通じて社会に広がり浸透する言葉の機能を貨幣の流通に喩えている。貨幣が使用を重ねるうちに摩耗するように、日々使われる言葉の機能もまた、時と共に衰退していく。だからこそ、詩の言語機能を更新することによって、新しい「言葉」を鑄直し再び流通させていくべきだ、というのがパウンドの論の主旨であった。<sup>28</sup> イエイツの詩作は1914年の『責任（Responsibilities）』を境に、前世紀の夢幻に満ちた幻想的な作風と比べ、そのスタイルをモダニズム風へと大きく変えていく。その出版にあたってイエイツは、自分より若手の文筆家パウンドが行った原稿の添削と大幅な改変を受け入れている。言葉を手段として創作し表現する詩人であればこそ、言葉と社会の有機的な結びつきを強く自覚するはずだ。

ある民族（とその言語）が、独自の思想を持つことは重要なことだ。しかしこの思想の維持体系である「言語」は、時と共に常に摩耗していくものでもある。詩人の役割とは、こうした日常言語を、まるで擦り減った貨幣を鑄直すように刷新し（new-mint）、巷の散文に新しい活力溢れる言葉を供給してやることなのである。<sup>29</sup>

<sup>28</sup> 伊達直之「『ポエトリー』誌の編集理念と詩論」, 88-103, 「パウンドの『リトル・レビュー』誌編集—「個人主義」ということばの網の結び目—」, 『オベロン』第29巻第1号（東京：オベロン会, 2000年）, 103-113.

<sup>29</sup> 伊達, 96. 原典はEzra Pound, 'The Wisdom of Poetry', *Ezra Pound's Poetry and Prose*, Vol.1 (New York and London: Garland Publishing, Inc., 1991), 74.

このパウンドの詩論は、1912年10月、世紀末以来閉塞状態にあった英米詩の現状を打破し、同時代の詩の刷新と現代化を試みる目的で、初の自覚的「モダニスト」誌として企画された『ポエトリー (*Poetry: Magazine of Verse*)』創刊の際にパウンド自身が強調したものであった。その背景には、『ハーパーズ (*Harpers*)』のような高級誌が、1870年代に確立した文体を20世紀に入った後も頑なに固守していたことへの反発があった。そのように、摩滅した貨幣のように、使い古された言語を虚しく循環させるのは止め、詩の言語と現代社会とのつながりを新たに見直した上で、文化的発展に寄与すべきだ、とパウンドは考えたのであった。<sup>30</sup> この点について伊達直之が指摘するように、現代詩は「現代を映す」べきであり「言語」そのものが他の造形芸術の素材同様、加工されるべき媒体である、との主張がパウンドの考えである。<sup>31</sup> それはまた現代美術にも当てはまることで、美術や工芸もまた「現代を映す」ために可変的であるべきなのだ。

## 6. 新しい貨幣に対する民衆の反応

しかし、発表された貨幣デザインは、アイルランド社会にはすぐには好意的に受け入れられなかった。拒否反応が示された要因のひとつとして、動物をテーマとしたモチーフがキリスト教信仰の国において、異教徒のものだと見做されたことがある。とくにカトリック信者のコミュニティから、「異端のシンボル (pagan symbols)」は自分達の信仰生活 (the very life of our Catholicity) に不適切だという抗議が寄せられた。<sup>32</sup> 貨幣デザイン選定委員

---

'Thought is perhaps important to the race, and language, the medium of thought's preservation, is constantly wearing out. It has been the function of poets to new-mint the speech, to supply the vigorous terms for prose.'

<sup>30</sup> 伊達, 96-97.

<sup>31</sup> *Ibid.*, 92.

<sup>32</sup> Thomas Bodkin's Postscript to 'Coinage of Saorstát Éireann', in *Ireland's Coinage*, 56.

会の構成員であったトマス・ボドキンは、1928年11月30日、ダブリン美術学校で行われた講演で、そうした批判に対し次のように反論した。

硬貨とは、人々の富を示す有形の証である。古代において、富は常に家畜を手段として測られてきた。以来、*pecunia*という金銭を意味する言葉が、*pecus*つまり動物を意味する語に由来したのだ。アイルランドの富は今もなお、この土壌の生産物からありあまる程に産出されている。それゆえ、我々の貨幣に象られた、これらの産物以上にふさわしいデザインなど一体何があるというのだろうか？<sup>33</sup>

このようにボドキンは、自分達が参考に用いた古代都市の硬貨を例に出しながら、牧畜動物がいかに国家の富の象徴となり得るかを力説した。

その貨幣デザインに対するもうひとつの不満要因は、アイルランドのナショナルシンボルとして親しまれていたシャムロック(三つ葉のクローバー)や、それをを用いて三位一体を説いたとされるアイルランドの守護聖人、聖パトリックのモチーフなどが却下されたことにある。これについてもボドキンは、家畜の売買や酒場での賭け事に守護聖人の肖像を使うのかと、また、あまりにも美しい聖人像が硬貨に施されたならば、必ずや人々は護符とするためにそれらに穴を穿ち貨幣を毀損した科で犯罪に問われるだろうと、ユーモアを交えて反論している。<sup>34</sup>

ここで、退けられたモチーフとその不採用理由を検証してみると、時代に合った伝統の刷新というイエイツらの取り組みの意義がより明確になる。貨幣デザイン選定委員会は発足当初から「シャムロックなどの世間ずれした陳腐なシンボルは選択しない」<sup>35</sup>と決定していた。この判断は、「王立ア

<sup>33</sup> Thomas Bodkin, 'The Irish Coinage Designers. A Lecture Delivered by Thomas Bodkin, D. Litt., at the Metropolitan School of Art, Dublin, 30th November, 1928', in *Ireland's Coinage*, 45.

<sup>34</sup> *Ibid.*, 43.

<sup>35</sup> McCauley, *Ibid.*, 34. 'The Committee is strongly of opinion that hackneyed

「イルランド古物協会」の提言に基づいていて、根拠として植物学者ナサニエル・コルガン (Nathaniel Colgan) が1896年に発表した論文 ('The Shamrock in Literature: a Critical Chronology') が挙げられた。それによると、聖パトリックが三位一体を説くためにシャムロックを用いたと例証できる記録はほぼ残存しないという。むしろそれらは通俗的に食用植物とされ、時には口臭予防にさえ使われたということである。シャムロックが貨幣に用いられた例は、1660年から1670年のキルケニー地方でのハーフペニー銅貨に見られ、聖パトリックがシャムロックを掲げる姿が彫られたと記録されている。しかし同じ頃1681年に英国人探検家トマス・ディンリー (Thomas Dinely) が残した聖パトリック祝祭日の描写は、敬虔さよりも飲酒に関連した低俗さが強調されているという。その後1727年になって初めてシャムロックが三位一体と関連付けて文学に登場したということである。<sup>36</sup> さらに、テューダー朝以降16世紀から17世紀にかけてアイルランドでシャムロックが食されていた調査記録が残っている。例えばエドモンド・カンピオン (Edmund Campion) の報告 (*Historie of Ireland*, 1571) には、シャムロックがミズガラシやその他のハーブ類と並んで食されていたと記されている。1580年代初頭には英国詩人エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) などもまた、当時マンスター地方で起こった飢饉の際に人々が同じくこれらの植物で飢えをしのいでいたと記録している。<sup>37</sup> これらの報告や記録を照合してみると、シャムロックは実際には20世紀初頭にアイルランドの庶民一般が期待していたような高潔さや敬虔さとはかなりかけ離れたものであったのだ。

以上から分かるように、貨幣デザインに対する異議の大部分が国内から噴出したものであり、保守的なカトリック寄りの宗教的観点から述べられた抗

---

symbolism (round towers, shamrocks, wolf-dogs, sunbursts) should be entirely avoided'. このような方針を表明しながら、委員会は例外的にアイリッシュ・ウルフハウンドだけは貨幣モチーフとして選択した。

<sup>36</sup> J. J. McElligott, M.A., Secretary to the Department of Finance, 'Irish Coinage Past and Present' in *Ireland's Coinage*, 23-24. Sheehy, 9-10.

<sup>37</sup> Sheehy, 9-10.

議であった。対照的に、そして皮肉なことに、これまでアイルランドの独立を許して来なかった英国の側から、好意的なコメントが寄せられた。例えば『マンチェスター・ガーディアン紙 (*Manchester Guardian*)』の批評家は「アイルランドを差し置いて、他にどこの国がこのような貨幣デザインを可能にする条件を定める想像力と自由を持ち得ただろうか」<sup>38</sup>と述べた。『ネイション紙 (*Nation*)』は「(アイルランド) 自由国は世界で最も美しい一連の硬貨を手にした」と、『イヴニング・スタンダード紙 (*Evening Standard*)』は「我々は美しく斬新なアイルランド硬貨を羨ましく思うだろう」と称賛と羨望の賛辞を送った。<sup>39</sup> これら両国に見られる反応の差が、懐古的で旧来のものに固執するあまり斬新さを備えた創造性を肯定的に受け入れられないアイリッシュの偏狭さを際立たせ、さらにこのような精神的土壌にあっては伝統を刷新して発展を遂げるような芸術行為が行き詰っていくことを暗に示している。それはまた、「ケルト復興」と総称された文化活動が衰退していったことと無関係ではない。

## 7. おわりに

アイルランド自由国の貨幣は、発行初年から10年と経たないうちに本来のデザインを変えられていった。それは、あたかもアングロ・アイリッシュ達が前世紀から培ってきた芸術的営みとその輝かしさを失っていくのに呼応しているかのようであった。1937年に共和国派の党首イーモン・デ・ヴァレラ (Eamon de Valera, 1882-1975) が政権に就くと、<sup>40</sup> 共和国としての新憲法が制定された。それと同時にアイルランドの貨幣からは「自由国」を示す「Saorstát Eireann」が消え、「Eire」のみが残された (【図1～4, 6, 7】)

<sup>38</sup> *Ireland's Coinage*, 60.

<sup>39</sup> *Ibid.*

<sup>40</sup> デ・ヴァレラは1916年の「復活祭蜂起」を指揮したひとりであったが、アメリカ国籍であったため他の首謀者達と異なり処刑を免れた。

を比較参照)。その後も度重なるインフレーションによって、貨幣の構成金属の配合も単位も改められていった。ヤマシギをモチーフとしたファージング硬貨は50ペンス硬貨に（【図8】）、鮭のフロリン硬貨は10ペンスへ（【図2】参照）、牛を象ったシリング硬貨は5ペンスに変更された（【図3】参照）。1970年には半クラウンという単位が無くなり（【図1】の1998年硬貨は20ペンス）、他の硬貨も次々に流通が廃止された。1973年にアイルランド共和国がEUへの加盟を決定した後、2002年にユーロ通貨が導入されると、上記の硬貨は全て貨幣としての機能を失い、現在では筆者を含めコレクターの収集対象となっている。

しかし、1920年代の不安定な政治状況にありながらも現代社会を見据え、現代を生きる人々の解釈を加え、新しく進展した表現を発信しようとして推し進められたイエイツらの貨幣デザイン選定プロジェクトは、パウンドの貨幣流通に基づく詩論を、実体を伴った硬貨の形で実証してみせた。このプロジェクトを導いたイエイツの芸術的見識は、決して懐古的ではなかった。悲願の独立を叶えたアイルランド自由国の存続がいかに危ぶまれようとも、古代から受け継がれる自国の歴史と文化的伝統を重んじながら繁栄を願い新しい時代を歩んでゆくのに相応しいシンボルが、小さな硬貨のひとつひとつに刻み込まれたのだ。

## W. B. Yeats and the Coinage of Irish Free State

— The Emblem Search in Tradition and Modern —

Yuki TAKAHASHI

This article focuses on William Butler Yeats's literary and political activities in the 1920s. When Irish Free State was established in 1922, Yeats was appointed senator. During nearly six years of his tenure in this office, he made efforts to preserve the cultural heritage fostered by now socially marginalised Anglo-Irish, although within an increasingly repressive and narrow-minded system of national government. Contrary to the political progress as one independent modern nation, the 1920s saw the gradual decline of its cultural movement which used to be well known as the Celtic Revival in the previous century. The major cause of decline lied in the wide-spread, unconscious dependence on a distinctive national style derived from Celtic tradition, such as the imitative or copyist tendency in reproducing outdated Celtic ornaments. However, there was one exceptional occasion in Irish national politics that suggested a key to overcome this stagnant state of Irish art characterised by the spirit of the Celtic Revival.

In the Coinage Act of 1926, the denomination and weights of the first coins of the Irish Free State were prescribed. The Minister for Finance decided to leave the choice of designs to specialists with artistic knowledge, and the Irish coinage committee was set up, appointing Yeats chairman. The committee's project to select the national emblems for the new coins dealt with a question on how a modern designing could develop by refreshing the past tradition. They decided not to select familiar old

emblems such as the shamrock or St Patrick the popular patron saint of the country. Instead, for one side of the coins the committee selected the motif of Irish harp as the symbol of national history, and for the other side a series of Irish animals and cattle symbolising the people's industries and wealth. This process, in which overused symbols lose value and are replaced by novel designs, is analogous to the way in which coinage itself loses value with passing time, due to wear and tear.

The following steps of the coinage design project proceeded in the form of an international competition inviting contemporary sculptors. In 1927, by the committee members' unanimous vote, Percy Metcalfe the young English sculptor was announced as the winner. Considering both the process and results of this coinage project, the committee's search for artistic novelty to modernize Ireland's tradition parallels the simultaneous search for new forms of verbal expression to modernize Irish literary creation.

There was a certain point in Yeats's literary career when his poetic style changed after the first decade of the twentieth century. The publication of his *Responsibilities* (1914), which manifested his parting with old style and themes related to the Celtic Revival, underwent thorough revision based on the critical advice by Ezra Pound, a young, influential American poet and critic. In those days Pound emphasised the need to modernise contemporary poetry by breaking through the outdated literary tradition of English poetry which had remained static since the previous century. In developing his literary theory, he increasingly used economic terms associated with minting coinage and monetary circulation. Yeats's change in poetry style, forced by Pound, may well have influenced him to see the need to refresh the old tradition in Irish coinage designing. After all, sometimes both literary style and currency need to be updated. Thus

Yeats's coinage project became a notable event, and demonstrated modern Ireland's new-minted cultural representation.